

高校中退問題

高校生の中途退学問題は、文科省の調査の結果、全体として減少傾向にあるということもあり、余り深刻な議論はされていませんが、内実は、かなり深刻な状況にあるのではないかと考えています。

道教委の調査では、道内の公立高等学校の平成22年度における中途退学者は1,880人（中途退学率2.1%）と、平成16年度以降最低となっています。

これは、各学校における学校運営、生徒指導の成果とあって良いでしょう。ただ、この調査で中途退学の実像が明らかとなっているのかといえば、必ずしもそうではありません。例えば、いじめや学業不振、学校生活に馴染めないといった理由であっても、辞める前に次の学校が見つかり、切れ目なく転校した場合には、中途退学には含まれていないからです。従って、実質的な中途退学者は、文科省の調査よりも多いと見なければなりません。

さて、高校全入時代といわれて久しい中で、高校生は何故、中途退学してしまうのでしょうか。その理由について、道教委の調査では、

- 進路変更（39.8%）
- 学校生活・学業不適應（39.8%）
- 家庭の事情（5.1%）
- 学業不振（4.7%）
- 問題行動（4.3%）
- 病気が死亡（3.7%）
- 経済的理由（1.1%）
- その他（1.5%）

となっています。

病気やけが、あるいは就職など明確な目的があって進路変更する場合は別として、目的のはっきりしない進路変更や学校生活・学業不適應、学業不振、問題行動、これらは相互に絡み合っており、問題の根は同じところにあると思っています。

不本意ながら入学してきた。義務教育から心太のように押し出されて高校に

入ったものの、学力が全く不足しており、高校の勉強にはついていけない。周りに対する興味関心だけでなく、自分自身に対する思いも希薄である。精神的にも自立しておらず、自ら積極的に勉強しようとしなない。

中途退学した生徒にはこうした傾向が強いと思われますが、そこには、その子どもが成長していく過程における親子関係や友達との人間関係が大きく影響していることは否めません。また、昨今の経済不況の中で子どもの貧困問題が深刻化しており、こうしたことも中途退学の背景として考えていかねばなりません。それだけに、中途退学問題を、高校教育の中だけで解決していくことが難しくなっていることは事実です。

だからといって、中途退学を、ただ手をこまねいて見ているわけにはいきません。何故なら、高校を中退したままでは、将来の生活設計が成り立たない、自立した生活を営むことが非常に難しいという現実があるからです。生徒は、将来を甘く考え、気軽に中途退学を選択するかも知れませんが、周りを取り巻く教師や保護者までも、それで良しとすることは許されません。

10代の子ども達が、自分の良さにも気付かず、内に秘めている力を伸ばす機会もないままに、誠に貴重な時間をただ消費していく姿を見ることは、誠に辛いことです。

中途退学者の約6割は、高校の第1学年の段階で退学しています。だとすれば、教師の皆さんは、入学してきた生徒達に対して、その心をわしづかみにするような強いメッセージ、3年間お前達を離さないという思いを生徒達にぶつけていく必要があるでしょう。

生徒指導困難校といわれている学校で勤務された教師の皆さんから、生徒指導の大変さは並大抵のことではないとお聞きしています。

だからこそ思うのです。教師お一人おひとりの力量が問われているのだと。是非、教師の皆さんは、その人間力で生徒達を圧倒してください。

また、学校としても、各家庭との連携をしっかりと取りながら、学び直しを初めとした学習サポートをしていく必要があります。場合によっては、保護者の協力が得られない場合もあるかも知れませんが、学校は、決して生徒を見捨てないという姿勢を崩してはなりません。折角受け入れた生徒なのだから、一人の人間として自立して生きていけるよう、3年間しっかりと教育して卒業させて欲しい、その為に最善の努力を尽くしていただきたいと願っています。

そうしてこそ、高校教育は、その役割と責任を果たしたといえるのではないのでしょうか。（塾頭 吉田 洋一）